（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	長谷川　千紘
論文題目	心理臨床場面における物語の位相 —パラダイムとしての「物語」の再検討		

（論文内容の要旨）

本論文は、深層心理学的心理療法の一つのパラダイムとされてきた「物語」を問い直そうとするものである。第一章ではまず、本論文の依拠する心理療法とそれにおける物語の位置づけについて、ユング（Jung, C.G.）の論を参照しつつ整理し、心理療法における物語の本質を「〈私〉の主体的行為」すなわち「自らの内面を物語ってゆくこと」と捉えた。そのうえで、神経症の治療から始まった心理療法がその対象を広げていくなかで、「自らの内面を物語ってゆく」というスタイルを貫くのみでは展開しない症例が報告されるようになっている現状を報告し、さらに、こうした症例の実状を描き出すことを通して、物語というパラダイムを問い直す必要があるのではないかという問題提起を行った。

続く第二章では、物語るという行為が一般にどのように行われているのかを検討するために、大学生群を対象に箱庭を用いた調査実験を行った。制作者の語りの分析から、イメージを物語るという行為はイメージに没入してそれを実現するという体験と、イメージを見通すという体験が微妙なバランスのもとに同時的に生じるものと考えられた。それに対して、そもそも内的イメージが生じておらず、「物語を作ることができない」という事例が見出された。こうした調査事例は、イメージを物語るという心理療法のパラダイムそのものに疑問を突きつけるものと考えられた。

これをふまえて第三章では，アレキシサイミアという概念から、物語ることの難しさが指摘されてきた心身症・身体疾患を取り上げ、なかでも心理療法のニーズの高い甲状腺疾患を対象に、彼らが「いかに自らを物語るのか」について検討した。甲状腺疾患群と神経症群に半構造化面接とバウムテストを施行した結果、甲状腺疾患群では「内面を通過しない」「内面が外側に委ねられている」「内面に踏込まない」といった類型の語りが多く見出され、自らの気持ちや内的感覚が語りに現れてきにくいことが指摘された。これは、バウムテストの結果と合わせて病態水準と自我境界との関連から考察された。これは主体のあり方という観点から考察しなおされ、内面に焦点付けられない語りは、近代主体を中心に考えると〈私〉のない語りと捉えられるが、日本の中世の物語に見られる主体意識と近いところがあることが指摘された。心理療法においてこうした語りにアプローチするためには、「自らの内面を物語ってゆく」あり方ではなくて、どこか一点〈私〉の現れてくる瞬間を捉えることが大切ではないかと考えられた。

第四章では，「〈私〉がない」ということを訴える青年期女性の自験例を取り上げて、継続的な事例のなかでクライエントがいかに物語り、それがどのように展開していくのかを検討した。つくられた物語から始まった心理療法のプロセスは、「〈私〉がない」という現実に直面することを通して，次第に物語ることができなくなってゆく。しかし、リアリティのなさが究極的に体験されることによって、そこからもがき、挑戦する〈私〉が現れてくることになった。つくりものではない、〈私〉にとって意味のある物語というのは、いかに〈私〉のリアリティに開かれるかということが大切であると考えられた。

第五章では、これまでの考察を踏まえて、「物語」というパラダイムの見直しを行った。「自らの内面を物語ってゆく」というスタイルの通用しにくい症例というのは、物語る主体としての〈私〉を予め想定しえないものと捉えられた。こうした症例では、流れてゆく語りのどこに〈私〉のリアリティがあるのか、そこからどのように〈私〉が立ち上がってくるのかを捉えることが重要であることが指摘された。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、深層心理学的心理療法の一つのパラダイムとされてきた「物語」に関して考察し、それを問い直そうとするものである。

第一章ではまず、本論文の依拠する心理療法とそれにおける物語の位置づけについて、ユング（Jung, C.G.）の論を参照しつつ整理し、そのうえで、「自らの内面を物語ってゆく」というスタイルを貫くのみでは展開しない症例が報告されるようになっている現状を述べ、「物語」というパラダイムを問い直す必要があるのではないかという問題提起を行っている。心理療法の重要なパラダイムである「物語」について、その重要性を認識したうえで、その意義を改めて問うという本論文の問題意識は、現代の心理療法にとって、きわめて臨床的意義があると考えられる。

続く第二章では、「物語る」という行為そのものを検討するために、大学生群を対象に、箱庭を用いた調査実験を行っている。制作者の語りの分析から、「物語る」という行為は、イメージに没入してそれを実現するという体験と、イメージを見通すという体験が微妙なバランスのもとに同時的に生じるという知見を得ている。また、そもそも内的イメージが生じておらず、「物語を作ることができない」という事例も見出された。本章の調査結果や事例から、イメージを物語る体験が具体的に示されている。

さらに第三章では，アレキシサイミアという概念から、物語ることの難しさが指摘されてきた心身症・身体疾患を取り上げ、なかでも心理療法のニーズの高い甲状腺疾患を対象に、彼らが「いかに自らを物語るのか」が検討されている。甲状腺疾患群と神経症群に半構造化面接とバウムテストを施行した結果、甲状腺疾患群では「内面を通過しない」「内面が外側に委ねられている」「内面に踏込まない」といった類型の語りが多く見出され、自らの気持ちや内的感覚が語りに現れてきにくいことが見出された。なお、内面に焦点付けられない語りは、近代主体を中心に考えると〈私〉のない語りと捉えられるが、日本の中世の物語に見られる主体意識と近いところがあるという著者の指摘は、興味深いものである。また、心理療法においてこうした語りにアプローチするためには、「自らの内面を物語ってゆく」あり方ではなく、〈私〉の現れてくるどこかの一点・瞬間を捉えることが大切ではないかという指摘は、示唆深いものであると考えられた。

第四章では，「〈私〉がない」ということを訴える青年期女性の自験例を取り上げて、継続的な事例のなかでクライエントがいかに物語り、それがどのように展開していくのかが検討されている。つくられた物語から始まった心理療法のプロセスは、「〈私〉がない」という現実に直面することを通して，次第に物語ることができなくなってゆく。しかし、リアリティのなさが究極的に体験されることによって、そこ

からもがき、挑戦する〈私〉が現れてくることになった。つくりものではない、〈私〉にとって意味のある物語というのは、いかに〈私〉のリアリティに開かれるかということが大切であるという著者の主張は、事例に裏付けられて、説得力を増した。

第五章では、「自らの内面を物語ってゆく」というスタイルの通用しにくい症例では、流れてゆく語りのどこに〈私〉のリアリティがあるのか、そこからどのように〈私〉が立ち上がってくるのかを捉えることが重要であることが指摘されて、論が終えられる。

物語の限界を突き付けられつつも、そこにとどまりながら、物語の真の意義と力を見出したことは、本論文の特筆すべき成果であると評価されよう。

試問においては、箱庭に関する調査と、甲状腺疾患における調査から浮かび上がってきた結果とがどのように対応しているのかについて問われ、両者の関連性が見られるとよかったという指摘がなされた。また、「病態水準」という分類モデルの限界も指摘され、むしろ、「物語り方」の違いによる臨床的スペクトラムの可能性につて議論された。

しかし、これらの指摘は、本論文の今後の可能性への課題と期待であって、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 26 年 1 月 28 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降